

◎中学生の部

その他の良い作品

ドキドキ ワクワク

西中学校 二年

梅田 聖玲音

慣れない環境
新しい生活
大変なことだらけ
でも毎日友達がい
たから楽しかった
幼稚園の頃からの
友達
小学校からの友達
新しい友達
1から慣れていく
生活の中で
欠かせない存在

吹奏楽部に入って
2年目
新1年生の姿に1
年前の自分を重
ねる
あの日に感じた
先輩達への憧れ
は

今でもハッキリと覚えている
3年生と演奏する最初のコンクール
そして、初めてのソロ
毎日一生懸命練習した
本番当日、私の心臓は
ドキドキ ワクワク
ひとつ呼吸して
光の中に進む
大きな大きなホールに
私の音を届けるんだ！

言葉と共に

西中学校 三年

大塚 柊之介

言葉にはいろいろな顔がある
喜び 怒り 悲しみ 楽しみ
言葉にはいろいろな感情がある

言葉はボールだ
相手に怒りの言葉を当てれば自分にはね返つてくる
逆に喜びの言葉を当てれば自分にはね返ってきてくれる

言葉はナイフだ
言葉のナイフで相手を刺せば相手は簡単に傷ついてしまう
けれど
使い方さえ変えれば
ナイフは人を笑顔に変えてくれる

言葉は鍵だ
鍵を大切に使えば

温かい明るい未来につなげてくれる
だから
何回でも努力しよう
幸せの扉を開けるために

そして
羽生の植物のように
地中に根を張り
何度踏まれても
諦めずに生きよう
言葉と共に

僕のオアシス

東中学校 一年

木村 悠聖

僕は自分の住む地域が大好きだ
窓を開け 深呼吸をし
目を覚ますのが日課だ
雨の日の匂いは いつも以上に落ち着く
移り変わっていく景色を
間近で感じる事ができる
家の前の田植えが終わり
苗がすくすく育ち 辺り一面 綺麗な緑色
一年間の中で一番好きな景色だ
真っ白のしらさが
通学を見守ってくれる
新しい自転車のベルを鳴らしても
「いつてらっしゃい」といわんばかりに
ゆっくり ゆっくり 足を動かし
通学路を通っていく
夕方戻って来た時にも同じ田んぼにいた
僕の帰りを待っていたのかな
夏のある日 僕は車の窓から感じた
少しの距離で 全く違う景色を

都会では
街のネオンがキラキラと輝いていた
家まで戻ってくると真っ暗だ
そして夜空に星が輝いていた
見上げると夏の大きな三角形がはっきり見える
家族との会話がはずむ
「ジー ジー」 「チリチリチリ」
虫たちが奏でる自然の音に耳を澄ませ
心が落ち着く
豊かな自然に囲まれ
ここだけにしかない魅力がいつぱいだ
朝 採れたてのきゅうりにトマト
ナスをいただき 元気がみなぎる
今日も一日頑張るぞ
これから
ずっと大切にしていきたい
僕のふるさとを

夏の知らせ

西中学校 一年

白石 壮

来年もまた会いましょう
家の守りをご苦労様です

今年もまたそれはやってきた
台所の窓にうつるシルエット
それは薄桃色で5本指
落ちまいと必死に窓にしがみつく
それは何とも奇妙で

それはいつの間にか現れ
いつの間にか姿をくらます

居ないと何処かさみしく
居ると安心する

その訪問確認が
毎日の日課になっている

それは夏になると突然やってくる
それは夏を知らせてくれる

今年もまた会えましたね

私のひいおばあちゃん

西中学校 二年

杉浦 彩華

私の家の裏には、今年九十歳になった私のひいおばあちゃんが大きな家に一人で暮らしている。

ひいおばあちゃんは料理上手だ。

お盆になると、ぼたもちを作ってくれる。

自家製あずきを煮て作る、甘いあんこたっぷりの大きなぼたもち。

家族みんなの大好物だ。

お線香をあげた後、お母さんにひいおじいちゃんの事を聞いてみた。

私のひいおじいちゃんは、私のお母さんが生まれる前に亡くなってしまったから、お母さんも会った事はないそうだ。写真を見る限りひいおばあちゃんよりもずっと若くて、なかなか格好良い。ひいおばあちゃんも写真を見ながら、なつかしそうでこう教えてくれた。「ぼたもちが大好きでね、一度に三つも四つも食べちゃったんだよ」と。

私は驚いた。この大きなぼたもちをそんなに

たくさんと。

続けて「とうちゃん、今年のぼたもちの出来はどうだんべ、いやんべいに出来たかい？」

「いやんべい？」

私はまたまた驚いた。

お母さんは聞き慣れているようでこう教えてくれた。

「ちようどいい甘さかな？」っていう意味だよと。

ひいおばあちゃんの言いまわしは独特だ。

聞きとることが難しい言葉づかいが多い。

でもきつとこういうのが親しみを感じる羽生の古き良きところなのだろうと私は思った。

家に戻ってから、ひいおばあちゃんのぼたもちを食べた。

「いやんべいだね」とほほえんだ。

あの校庭

西中学校 一年

長野 真緒奈

窓の奥にある校庭
授業の時、休み時間の時
いつも目にはいる
あの校庭
校庭はまるで人のように
気持ちがある
ように見える
喜び・悲しみ・苦しみ…
私を支えてくれた
あの校庭
勉強
部活
授業
すべてにおいて
いつも見守り
元気づけてくれた
ざせつしそくなとき、
なかなかうまくいかないとき
私の弱いところまで

親のように知っている
あの校庭は
ただの校庭ではなく
いやなことが忘れられるかのような
特別な校庭だ。
そして
私も
あの校庭のように
なりたい!!
だれかのためになるような
支えてあげられるような
人間に

中学校へのいきごみ

西中学校 一年

野田 彩瑛

夏の日差しが強い日に
ほっぺが真っ赤な小学生とすれ違った。
鼻に汗をかきながら重そうなランドセルに手
さげを持って
何だか懐かしくて、可愛いな。と思わず思っ
た。
私も数ヶ月前まで小学生だったのに。
私が小学生の時は
大きなタイヤの自転車で通学するお姉さんに
あこがれていた。
自転車ぐんぐんこいで、とてもキラキラして
いていつも笑顔で挨拶してくれた。
お姉さんはどの部活に入っているんだろう
授業は難しいのかなと色々想像していた。
そして今年、私も中学生になった。
あのお姉さんの様に小学生に憧れてもらえる
中学生になっっているかな。
まだ自信はない。
でも、お姉さんみたいに笑顔で挨拶したい。

「おかえり、今日は暑かったね。」

背比べ

南中学校 一年

橋本 その

今年も迎えに行く。私と、兄と、母と祖母の四人。車を走らせて十分で着く。

「久しぶりー。」

墓石を水でぬらしてきれいにする。祖父が亡くなつて今年で三年。あのときから背丈は二十センチほど大きくなつただろうか。急に身長が伸び始め、家族に自慢しては背を比べた。祖父と背を比べたことは無かつたが、三十センチほど差があつたと思う。今では十センチちよつとになつた。びつくりしてくれてるかな。成長したと実感する。誇らしくなる。

祖父は厳しい人だつた。家族で一番背が高くて、怒ると怖くて、でも優しかつた。優しさに気付けたのは意外と最近かもしれない。昔は怖くて、話しかけるのにもちよつと勇気が必要だつたくらいだ。祖父は食事のマナーに特に厳しくて、箸や茶碗の持ち方や、迷い箸、刺し箸、音を立てないように食べるとか、

たくさんのことを注意された。昔はそのぐらいい良くない？楽しく食べたい。と思つていた。でもそのおかげで食事のマナーにはそこそこ自信が持てるようになった。マナーは人との交流をする上で大切なものだ。厳しく何度も教えてくれてありがとう。

線香の香りは好きだつた。火を付けるのは、私の役目。一人一人に、丁寧に線香を手渡す。笑顔で祖母と母は受け取つた。兄は線香の火を少し怖がりながらゆつくり受け取つた。きつと、今の兄の身長は祖父と同じくらいだろう。兄は二十センチ以上あの日から背が伸びただろうか。二人とも立派になつた。と思つてくれているだろうか。手を合わせる。来年のこの時季、もつと背が伸びているだろうか。来年の背比べが楽しみだ。

自然の音楽隊

西中学校 二年

濱崎 仁一路

風がみんなに
見えないチラシを配る
太陽のスポットライトが
あたりをてらす
木々がざわめき
始まりの合図を送る
さあ、舞台は整った
鳥たちは
みんな合唱している
流れる水は
鮮やかな旋律を奏でている
稲たちは
波をたてながら躍っている
そんな小さな自然の音楽隊は
今日も楽しく音色を奏でている
人々はそのまわりを
何気なく歩いている

私の部屋から始まる一日

西中学校 一年

深井 美緒

さわやかな朝
私の一日はこの部屋から始まる
カーテンを開け、大きく深呼吸
窓を開け、青空を見上げてみる
「よし。今日はいいい天気だ。」
鳥が歌声を響かせる
ガタンゴトンと電車の走る音がする
気持ちのいい風が吹いた
白いベット、白いピアノ
ウツド調の勉強机、クローゼット
小学六年生の時に、両親が用意してくれた
私の部屋は、
白とブルーを基調にしている、
私にとって最高の空間だ
本を読む
勉強をする
音楽を聴く
ピアノを弾く
この部屋で過ごす時間は有意義な時間とな

った
ランドセルが置いてあった場所には、
四月からランリュック置場となった
さあ、朝の準備をしよう
制服に着替え、髪を結ぶ
「気持ち引き締まる。」

木陰

南中学校 三年

藤倉 叶望

照りつける強い日差し
汗を誘うジメジメとした湿度
私はこんな夏がきらいだ
そんな中 私の味方をしてくれるのは
大きな木の影 木陰
自転車で登校している途中 私は決まって
私の影ごと優しく覆ってくれそう
木陰を探す
そしてその道を行く

地元の祭りや年中行事が無くなってしまった
今でも
自然は残り続ける
そして私たちを守ってくれる
たまに うつとうしいほどの光から逃げたい
ときだって
目の前に明るきなんていらないうって思うとき
だって、ある

そのとき、優しく静かな風を吹きこんでくれる木陰のような
どっしり佇みそつと寄りそつてくれる木陰の
ような
そんな存在が私たちには必要だ

私はこれからも進むことが嫌になったら
木陰に立ち止まるだろう
でも ずっとこうしちゃいけない
私はペダルを強く踏む
そして痛いほど明るい日差しがふりそそぐ
まるで私を明るい未来へ導いているようだ

改革の夏

西中学校 三年

山口 道

がんばりたい

受験を見据えはじめた夏
この夏を二つの大きな転換点としたい
一つは大きな目標を持つて
自分のできる限界までの挑戦を始めること
一つは自分の怠け、諦め癖改革だ
自分はこれまで大きな目標を持ってても
自分は出来ないと言いつつ
行動を起こさないと決心しても
怠け、これぐらいでいいと
本気で何かに打ちこむことから逃げてきた
だから、勉強をしなくてはいけない
この夏が転換点なのだ
宮澤賢治の詩のように
暑さや感染症にも負けず
怠け癖にも負けず
勉強から逃げたくなる自分にも負けず
根気よく一生懸命がんばりたい
時には蝉の鳴く田舎道を
散歩しながら心を休めて